

洋14-41 (ショートコメント)

「家族の灯り」 ★★★

2013 (平成25) 年3月23日鑑

賞<シネリーブル梅田>

監督：マノエル・ド・オリヴェイラ

原作：ラウル・ブランダン

ジェボ (帳簿係の老人) / マイケル・ロンズデール

ドロテア (ジェボの妻) / クラウディア・カルディナーレ

カンディニア (皮肉屋の友人) / ジャンヌ・モロー

ジョアン (ジェボの息子) / リカルド・トレバ

ソフィア (ジョアンの嫁) / レオノール・シルヴェイラ

シャミーソ (ジェボの友人) / ルイス・ミゲル・シントラ

2012年・ポルトガル・フランス映画・91分

配給/アルシネテラン

◆2013年12月に105歳を迎えた現役最高齢の映画監督マノエル・ド・オリヴェイラが、往年の名女優イタリアのクラウディア・カルディナーレとフランスのジャンヌ・モローを起用して、舞台のようなかつ名画のような奥の深い映画を作り上げた。舞台は、帳簿係をしている老人ジェボ (マイケル・ロンズデール) の家の中。玄関のドアを開けるとすぐ、テーブルが置かれた居間があり、本作のほとんどの「会話劇」はその中で展開していく。

冒頭、ジェボの帰りを心配そうに待っている息子の妻ソフィア (レオノール・シルヴェイラ) の姿が登場するが、薄暗い石畳の通りやガス灯の描写はいかにもマノエル・ド・オリヴェイラ監督らしい雰囲気を出している。ジェボが帰ってくると、それを迎えた妻のドロテア (クラウディア・カルディナーレ) との間でどこにでもある家族の会話が始まるが、そこで目につくのは「息子について何か新しい情報はあったか」との質問。8年前に失踪した息子のジョアン (リカルド・トレバ) をめぐってジェボとドロテア、そしてジェボとソフィアとの間で展開される会話を聞いていると……。

◆クラウディア・カルディナーレといえば、『ブーベの恋人』(63年)、『山猫』(63年)等で、中・高校生時代の私たちを虜にした美人女優。他方、『死刑台のエレベーター』(57年)や、ブリジット・バルドーと共演した『ピバ! マリア』(65年)等で有名なジャンヌ・モローは、美人女優というよりも個性派・演技派女優で、『黒衣の花嫁』(68年)などのクセのある役がピッタリだった。

そんな2人がジェボの家の居間に並んで座ると懐かしい気持ちもあるが、2人も年を取っておばあさんになってしまったな、という思いの方が強い。したがって、オードリー・ヘップバーンの往年の姿をあまり見たくないのと同じように、正直言ってあまり嬉しいものではない。

ジャンヌ・モロー演ずるカンディニアは、テーブルの前で刺繍をしながらジェボやドロテアと取り留めのない会話を交わすが、どうも皮肉屋の友人らしい。そんな2人の会話を聞いていると、往年の美しい2人をよく知っているだけに、何となく切ない気持ちに……。

◆今ドキの日本の若者はおとなしいから、私たちの学生時代のような「反体制運動」は全く起きない。しかし、中国では共産党や政府幹部の腐敗に怒り、格差の拡大に怒った若者が「反日」で騒ぐ傾向がある。フランスだって若者が社会に対して不満を持つのは当然だが、8年ぶりに自宅に帰ってきた息子ジョアンの不平不満を聞いていると、イライラしてくる。これが一部の若者の不平不満を代表している意見であることはわかるが、そうかといって何ゴトにも反抗すればいいということにはならないはずだ。

ドストエフスキーの『罪と罰』では、主人公ラスコリニコフの不平不満が「老婆殺し」という結果に結びついたが、さて本作では?

◆帳簿係をしているジェボの仕事ぶりはいかにもまどろっこしい。これでは息子のジョアンから「親父は負け犬だ」と罵られても仕方ないような気もするが、それに敢然と言い返すジェボの姿を見ていると、それなりに誇りを持って仕事と人生に取り組んできたことがよくわかる。その結果、ジェボはかなり多額の現金を扱っているようだが、それをチャチな鍵だけの棚の中にしまうのはいかなもの……。ソフィアとの間で大金をめぐる会話が交わされ、大金の入ったカバンがテーブルの上に置かれ、それが棚の中にしまわれる一部始終をジョアンが目撃したら、「その気」になるのは当然では……。

夜中にジョアンがそれを盗んで外に出ようとしたのを見たソフィアは体を張って止めようとしたが、所詮ムダ。その結果、翌日には警察官がジェボの家を訪れてくることに。さて、そこでみせたジェボの対応は?

◆これが本作最大のポイントだが、弁護士の私の立場ではジェボのこの選択は支持できないうえ、その賛否は大きく分かれるはずだ。『レ・ミゼラブル』(12年)では、一夜の宿と食事を提供してもらったジャン・バルジャンに銀の食器を盗まれた神父は、警察官に対し「それは私が与えたものだ」と述べてジャン・バルジャンを救った(『シネマルーム30』48頁参照)が、さて本作にみるジェボの対応は? その是非は?

90分間ずっと本作を観続けるのは正直少ししんどいが、議論の素材としては面白いものになるはずだ。

201

4 (平成26) 年3月27日記